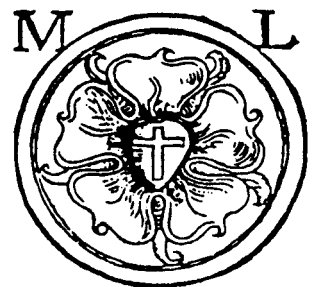


ルター 新聞

Die Luther Zeitungs

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr.70



五〇〇年からの出発！



A.Traini 画 “The Life of Martin Luther”
(アメリカで500年を記念して出版されたたびだす絵本)

二〇一七年、わたしたちは歴史的な一年を過ごした。宗教改革五〇〇年！国内外で、記念礼拝、講演会、音楽会、学習会、様々な出版や展示がおこなわれた。一九一七年、四百年祭が祝われたが、それから百年。何が変わったのか？ 二点あるだろう。

第一。ルターと宗教改革をより深く学ぶことができた。ルターを理想化するのではなく、その時代的限界と誤謬をも直視しつつ、しかし彼が本当に語りたかったことに耳を澄ませた。ルターの深さと偉大さ。宗教改革の原点を改めて学ぶことができたのである。

第二。五〇〇年はエキュメニカルであった。なんとと言っても、五〇〇年前の分裂と争いの当事者（カトリックとプロテスタント、とりわけルター派）が、和解し共に記念の年を祝ったのである。教皇と共に守ったランド礼拝、原爆の地ナガサキでの共同礼拝！

さあ、五〇一年目。ルターが本当に目指したことを、今度はわたしたちが受け継いでいこう！

今号の内容

- 2面 「五〇〇年からの出発」とは何か
- 3面 教会の五〇〇年の取り組み
- 4面 シリーズ「人間ルター」⑧
教える人ルター
ルターこぼれ話
——ルターとボーリング
- 5面 シリーズ「ルター研究の名著」
ピノマ『ルター神学概論』
ルターの言葉
- 6面 私のルター研究
「切手に見るルター」⑥
「切手とエキュメニズム」
- 7面 書評
深井智朗『プロテスタントイスマ
江口再起「ルターと宗教改革
500年」
日本ルター学会「ルターと宗教
改革」7号
- 8面 研究所ニュース

原点と共生――

「五〇〇年からの出発」とは何か

所長 江口 再起

五〇〇年からの出発

「五〇〇年からの出発」とは何か。宗教改革五〇〇年を祝った私たちは、そこから何を学び、それをどう活かしていくべきか。大事なことが二つあります。一つは、ルターから更に学び掘り下げるところ。ルターが本当に考えていたこと（原点！）を学び直し、五〇〇年後にふさわしく視野を拡大し、あえて言えばルターをさえ乗り越えていくことです。もう一つは、エキュメニカルということ。このテーマを突き詰めると「共生」という言葉が浮かんできます。

原点――ルターに学ぶ

何事にせよ、原点が大事です。ルターは本当に何を考え改革をすすめていたのか。大きく言えば三つあります。(一)信仰とは何か(信仰義認)、(二)聖書をどう読むべきか(聖書の権威)、(三)教会のあるべき姿(万人祭司)の、三つです。

しかし、もちろん原点を学ぶということとは、ルターを英雄視したり理想化することではありません。ルターにも誤謬があり時代的な限界があった。私たちは前に進まなければなりません。どのよう

に？ 私たちは五〇〇年後の世界に生きているのです。そこで「視野の拡大」と「現実の直視」が必要です。

宗教改革はヨーロッパの出来事であり、いやそもそも歴史的にみればキリスト教は欧米の宗教でした。しかし、今はちがいます。私たちは日本の地に生きている。「視野の拡大」が必要です。ルターについて、そしてキリスト教について考えるとき、アジアの視点、日本の視点がとても大事になります。

もう一つ、「現実の直視」、つまり現代的視点です。神、罪、救済……などなどキリスト教の基本語のどの一つをとって現代人にピンときているのだろうか。しかも混乱の度を深めている現代社会。その中でルターを考える。われらが同時代人としてのルター、そういう現代的視点が必要ではないでしょうか。

共生――エキュメニズムの時代

宗教改革によって、教会は分裂しました。しかし二〇世紀になって、まずはプロテスタント内部で、そして六十年代のカトリックの第二ヴァチカン公会議によって教会再一致運動(エキュメニズム

運動)が始まりました。

特にカトリックとルター派では「義認をめぐる共同宣言」をだすなど和解を押し進めてきました。そのすばらしい成果が、五〇〇年を記念して行われたルンド礼拝であり、ナガサキ礼拝でした。

このエキュメニズムの流れを、私たちは大切にし進んでゆかねばなりません。そして和解と一致というならば、キリス

ト教間の再一致のみならず、諸宗教間の対話を、そして更には全人類の平和と共生こそが、ルターが、聖書が、そして全ての人々が心の底から願っていることです。つまり人類的共生なのです。

原点と共生。これが「五〇〇年からの出発」ではないでしょうか。



500年の年、カトリックでもルターに学ぶ!

『カトリック生活』2017.10月号

表紙にルターの顔! 『カトリック生活』(ドン・ボスコ社)は五〇〇年の年、「ルターとカトリック教会」を特集しました。編集意図には、こう書いてあります。「カトリック教会側からすれば、分裂の痛い過去とも捉えられるが、その後の歴史において、さまざまな自己改革、プロテ

スタント教会との対話も行われてきている。過去から何を学ぶか。それは人間の責務である」。今やルターの存在はプロテスタント、カトリックを問わず全キリスト教の共通の遺産になりつつあるのでしよう!!



宗教改革五〇〇年の取り組み

日本福音ルーテル教会

宣教室長／五〇〇年記念事業担当 白川 道生

◆『宗教改革五〇〇年、推奨四冊』の刊行

二〇一三年から二〇一六年にかけて、一年に一冊、推奨図書が刊行されました。執筆・編集においてルター研究所の尽力を得て、出版しました。『マルティン・ルター』徳善義和著、『エンキリデイオン』、『アウグスブルク信仰告白』、

『キリスト者の自由』を読む。累計で約三万二千冊の購入がありました。

◆『ギフト・キャンペーン』を展開

五〇〇年を伝道企画と位置づけ、展開したのが『ギフト・キャンペーン』でした。「ギフト」とは「ルターの発見」＝恵みは、神様からの贈り物である、に由来しています。

*《バナー・キャンペーン》

全国統一のバナーを掲示しました。「ひとつのルーテル」の拡がりとして、一体感の可視化、体感が狙いでした。

*《ヤツオリ・キャンペーン》

イラストデザインでルターや改革の足跡を記した、A4用紙（八折判）のパンフレットを制作しました。

*《プレゼントブック・キャンペーン》

『悩み多き人生に答はあるか。マルティンに聞いてみよう』をルーテル教会が母体の学校・幼稚園保育園、福祉施設が学生、職員や保護者に頒布しました。

◆ルーテル教会／カトリック教会 共同主催

「平和を実現する者は幸い」

シンポジウム&共同礼拝

宗教改革は、一つであった教会に史上最大の分裂と対立をもたらしました。し

かし五〇〇年を経た今、両教会の関係は回復されています。そして二〇一七年、「宗教改革を共同で記念する」ため、日本でもカトリック教会とルーテル教会は共同で過去に前例のない記念行事を開催しました。

記念行事を企画するに際しては、今日の社会における両教会に一致した課題認識が下地となりました。国家間、民族間、宗教間の対立や争いが激しさを増す現代、かつて激しく争った両教会が「分裂から和解へ」と至った道筋を証言す

日本ルーテル教団

日本ルーテル教団 事務局長 松川 和義

二〇一七年の五〇〇周年を迎えるために、当教団では宗教改革五〇〇年委員会を立ち上げて、さまざまな企画を計画しました。共に礼拝で祝う事だけでなく、冊子を発行したり、聖書を読む取り組みもしました。

その中の一つである、聖書通読企画をご紹介します。

ルターの「みことばのみ、恵のみ、信仰のみ」から「みことばのみ」の言葉へ立ち返る企画として、共に聖書通読をする企画ができました。二〇一五年二月二九日待降節第一主日から始まり、二〇一七年一〇月一四日までの長い期間でした。そのために、「聖書通読手帳」という小さな冊

る、これは両教会に共通する使命です。会場は長崎のカトリック浦上教会の大聖堂。迫害と被爆の歴史の中、今なお戦争の痛みと悲しさを語り伝え平和を祈り行動し続ける日本のシンボリックな教会にみなで集まり祈りを捧げました。テーマは、「平和を実現する人は幸い」。両教会の司祭・教職、信者、そして諸宗教、超教派、国内外の来賓、一九二四名（ルーテル六二一十カトリック六二八+a）が参集して、シンポジウムと共同記念礼拝が執り行われました。

子を作りました。参加申し込みをされた方には、その冊子と共に、なんとあのルター人形がプレゼントされました。

また続けて読むための工夫として、一日二章ずつ読んでいく。そして一つの書巻が終わるとしばし休憩が挟まれています。日々読み続けるのだけれど、毎日ではなく、休み休み読み続けるように作られました。

結果として四〇〇名ほど参加者があり、終了後「聖書通読参加証明書」と、完読したと自己申告された方には、「聖書完読証明書」を差し上げました。みことばは、今も私たちの内に働いています。

シリーズ「人間ルター」⑧

教える人ルター

所員
鈴木 浩



中川浩之・画

マルティン・ルターは、修道会の指示で新設間もないヴィッテンベルク大学の旧約釈義（解釈）の教授になった。その際、ルターが最初に行った講義は、詩編の講義であった。ルターは修道士だったし、聴講する人も修道士や修道女など、教会関係者がほとんどだったと思われるので、これは自然なことであった。なぜなら、修道院での聖務日課（日々の礼拝）の主要部分は、詩編の朗唱だったからである。

詩編の講義が終わると、ルターは「ローマ書講義」、「ガラテヤ書講義」、「ヘブライ書講義」という具合に新約文書の講義に転じた。それは、詩編の講義をしている際に、三一編二節の「恵みの御業によってわたしをお助けください」という言葉に躓いていたからである。どうして躓いたのか。日本語訳ではどこにも「躓きの石」はないようだが、当時誰もが使っていたラテン語聖書では、その箇所が *In iustitia tua libera me*（あなたの

義によって、わたしを解放してください）となっていたからである。ルターが取り上げたこうした新約文書には、この「神の義」という言葉が出てくるのである。罪・不正・悪を絶対に赦さない「神の義（正義）」によって、どうして罪人が解放されるのか？ ルターはその謎に集中的な考察を向け、遂に「神の義」の理解にコペルニクスの転回をもたらした。

「神の義」とは、ローマ書三章二二節にあるように、「イエス・キリストを信じることに、信じる者すべてに与えられる神の義」のことであった。それは、「神の賜物としての義」であり、「信仰によって与えられる義」であった。

この「神の義」の新しい理解から、いわゆる「信仰義認論」が立ち上がってくるが、ルターは、この信仰義認論によって、教会のあらゆる教理（教え）、制度（仕組み）、慣行（習慣）、歴史の再検証を行っていく。それが、「ルターの神学」と呼ばれるものであった。

八面へ続く

ルターこぼれ話

「ルターとボウリング」

所員 高井 保雄



竹田孝一・切り絵

ボウリングの歴史は古く、紀元前五千年の古代エジプト人の墓の中に石のボウルとピンが発見される時代にまで遡る。西欧でも、当初悪魔払いの儀式として意味づけられ、やがて中世の僧院ではスポーツとしても盛んになってきた。修道院で八年間を過ごしたルターもこの愛好者の一人だった。ルターは極めて近代的な意識の持ち主でもあったが、他方では悪魔の存在を全く疑うことのない中世世界の人でもあった。当時、ボウリングは最も愛された悪魔払いの儀式だったようである。雪の降り積もる厳寒の冬、だだっ広い修道院の床を利用して、ボウルでピンを弾き飛ばすのは、修道士達にとって爽快な時間となった。

創意あふれるルターはこのボウリングのルールを創った。それまでは、ピン数さえ決まっていなかったが、九本の棒を一、二、三、二、一の菱形に並べて技を競うようにした。いわゆる九ピンボウルの始まりで、これは西欧中に広まった。天才モーツァルトもこれに熱中し、プレイ中に k487 を作曲するほどだった。新大陸アメリカに渡ったところで、ボウリングでの賭ゲームが盛んになり、ある州で「九ピンのゲーム」が禁じられると、知恵者が「一〇ピンのゲーム」を造った。それが現在の一〇ピンボウリングゲームの始まりとなったのである。

L・ピノマ『ルター神学概論』

石居正己訳 聖文舎（一九六八年）

原著〈Vaitava usko〉（勝利の信仰）は、米ミネソタのルーサー神学校での講義録をもとに、一九五九年に出版されたものだが、未だ色褪せることなく、またルター研究の入門書としてこれの右に出るものはないと言ってよい。多くの国で翻訳され、世界中のルター派神学校では必ずと言ってよいほど紹介され、教科書としても用いられている。著者は、レナルト・ピノマ。ルター研究においては「神の怒り」や「ルター神学の実存的性格」などの研究で知られる。

今から百年前、宗教改革四百年を迎える頃、ドイツのルター神学者カール・ホルに刺戟を受けてドイツからスカンジナビア諸国を中心にルター研究の盛んになった時代がある。「ルター・ルネッサンス」と呼ばれる大きな潮流となり、やがてニグレン、アウレンなどルンド学派と呼ばれる一連の研究者も生まれる。彼らと同時期にこのルター研究の進展に大きな貢献をしたフィンランドの神学者がピノマなのだ。

この本では、ルター著作の直接引用をしながらルター神学の主要な神学項目に全一八章を用いて丁寧に論じている。啓示、神の独占活動、予定、義認と聖化、

聖霊論、靈的試練の問題、教会、聖礼典、国家等、章のタイトルに含まれるもの、そうでないものでもルター的神学的な筋道を確認する時に知りたいと思う事柄ほとんどが論じられていると言ってよいだろう。また、日本語翻訳に向けて特別に第一二章の「キリスト教界」の項目が書き下ろされていて、他の国での翻訳には無いものが本書には収められている。

時代のなかで新しい神学的議論がある事柄については、著者の深い神学的洞察を加えて紹介しているが、様々な神学的主張を片寄りなく紹介し論じつつも、筆者の視点は明確に示され、単なるルター神学紹介というに留まらない研究書となっている。

翻訳には相当苦勞があったようだが、フィンランドからの宣教師の協力を得てなし得たものだったと聞いている。

(石居基夫 所員)

ルターのことば

所員 宮本 新

一人ひとりの言うことを聞き、それを通して、神が語り、働こうとしておられるのを待つべきである

(『この世の権威について、人はどの程度までこれに服従の義務を負うか』(1523年))

一五二一年、ヴォルムスの帝国議会でルターとその宗教改革は法外なものと認定され、否定された。およそ個人が経験する拒絶としてみればスケール感をともなう深刻な事態であった。そこで信仰と良心の自由を念頭に国家的な権力や主権の限界設定が試みられていた。事柄は世俗的で政治的な問題であるが、その観点はきわめて神学的な洞察であった。その脈絡でルターは通常と異なるニュアンスで刺激的なことを言っている。「だれをも信頼してはならない」、そして神を「待つべきである」と。

このようなルター的神学は極端で難解だと受け取られることもあるが、この「通常と異なるニュアンス」で刺激的なことを述べるところに原因の一端がある。修辭的な技法を意図しているわけではない。危機に直面し、ピンチに遭遇したときに鍛え上げられた信仰の言葉が逆説的なものとなる。ルターは「神のことば」を追い求めている人だ。状況は最悪で、あてになる人や打開策があるわ

けでもないとき、人はなにをすべきなのか。そこでも語りかけることをやめず、そこでも働きかけることをやめない何かを「待つべき」である。ルターの場合、神とはそのようなお方であり、み言葉とはそのようなものであったに違いない。待つことはその人の信頼と希望の在り処を言い表す言葉になる。ただ神のみを信頼するというルターの姿は「通常と異なるニュアンス」を帯び、その方向性は逆説的に自らを閉じるのではなくて、全方位的にその可能性を開くことにつながる。自らの立ち位置をきわめて現実的に理解し、同時に「一人ひとりの言うこと」を通して、神の恵みの探究者となる。混迷をきわめる状況で、何を信じたらいかが分からないとき、これは祈りの作法となり、道を切り開く活路にもなる。なぜならすべてを通して働く神の恵みへの底抜けの信頼がルターの「通常と異なるニュアンス」の核心にあるからだ。

私のルター研究

聖餐論

所員 立山 忠浩

私のルター研究は聖餐論である。神学校を卒業して牧会の現場に置かれた時から、毎週の説教を作成することに悪戦苦闘の日々であったが、それはみ言葉のリアリティをいかに掴み、それをどう語るのかの格闘であった。日曜日の夜が明けの頃になっても納得の行く説教が完成しないことの繰り返しである。その時期の私には、ことさらルターの聖餐論は不思議な輝きを放っているように思えた。ルターにとって聖餐は、キリストの現在のリアリティを放つものだったからである。しかも他の宗教改革者たちの誰よりも「キリストの現在のリアリティ」に拘ったことは魅力であり、研鑽を積み上げるに値する教えとなっていた。教会の現場で与えられた新しい、しかも切実な問題意識であった。

ルターの聖餐論は複雑である。スイスの宗教改革者たちとの論争に止まらず、同業者であったメランヒトンとの間でも聖餐論には相違があった。ルター没後も論争は鎮火することなく、ルター派内での激しい論争を巻き起こしたが、一応の決着を見たのは論争に疲れ果てた後のことである。聖餐論争だけではなかったが、諸論争の中心であったことは間違いない。幾多の論争を重ねた論ゆえに、内

容が実に複雑になってしまったのである。生涯の研究対象とするに値するテーマには間違いはないが、これまでの研究の途上で気づかされたことがある。ルターの神学的な理解は聖書解釈に根拠を置いていることである。「聖書に根拠を置いている」という定型の表現では実は十分ではない。それならば他の宗教改革者たちも同じだからである。聖餐論の相違とは、聖書のみ言葉の解釈の相違なのである。

そこから私には新たな研究の課題が加えられた。ルターの聖書解釈を研究することである。さらに踏み込めば、ルターのそれを問うことである。我々はこれまでルターの聖書解釈から恩恵を受けてきたが、それは今後も変わらない。ルターの聖書解釈が基本的な尺度である。しかし今日、ルターの時代とは異なる期待が教会には向けられている。例えば、他者との差別化ではなく共通項に視点を置くエキュメニカルな問題意識である。他教派だけでなく他宗教との対話さえも必然となっている。聖書の福音の真理は本来その期待に込められているであろう。その真理をルターがどう解釈したのか、探求は始まったばかりである。

切手に見るルター ②⑥

切手とエキュメニズム

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一

宗教改革500年にあたる昨年、多くのヨーロッパ諸国でこれを記念する切手が発行された。それ以外ではドイツ系移民の多いブラジルのみである。発行した国は、ドイツ、ハンガリー、アイスランド、ポーランド、スロバキア、イタリア、ヴァチカン市国などである。注目すべきは、総本山ヴァチカン市国をはじめカトリック諸国からも発行された点である。50年にわたるルーテル教会とカトリック教会の対話が、『争いから交わりへ』を生み、また昨年の長崎での共同礼拝を実現させたのは周知のことである。切手の世界でも同じ潮流を見ることができる。紹介するのはハンガリーとイタリアの切手である。

ハンガリーの宗教改革500年切手3種のうちの一種。ヴィッテンベルク城教会の扉に95か条の提題を打ちつけるルターが描かれている。

イタリアの切手は唯一「ルーテル教会500年」という題である。ドイツ・ワイマールにあるルーテル教会、ヘルダー教会の祭壇画の一部が図案化されている。画家はルカス・クラナッハ(子)。キリストの脇腹から血が父クラナッハの頭に降り注いでいる。クラナッハ父子については別の回で取り上げよう。



書評

『プロテスタンティズム — 宗教改革から現代政治まで』 深井智朗著 (中公新書、2017年)



日本語で読めるプロテスタンティズム論がほとんどない中で貴重な一書。また宗教改革500年の年の収穫の一つ。

深井氏によれば、一口でプロテ

スタントと言っても実は二つの流れがある。A「保守主義としてのプロテスタンティズム」と、B「リベラリズムとしてのプロテスタンティズム」。いささか乱暴にまとめると、Aは社会(国家)を支える制度的教会で大陸のプロテスタンティズム(特にドイツ)、Bは社会に批判的な自由教会でアメリカのプロテスタンティズムである。もちろん、それぞれに問題がある。Aは国家に迎合しやすい(ヒトラー時代)。Bは市場社会に適合した成功主義。鋭い分析である。この深井氏の立論には下敷きがある。有名な「トレルチ・テーゼ」である。プロテスタンティズムを18世紀の啓蒙主義を境に古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズムに分けたのである。このようにトレルチが時間軸にそって分類したことを、深井氏は空間軸に置き換えてプロテスタンティズム像を鮮明に描き出した。一つの整理の仕方として評価したい。

その他コメントを二つ。ルターについても当然触れられているが、おおむね勇気ある改革者というトーンで論じられる。しかしルターについてまず論ずべきは勇気云々よりも、信仰思想の特質とその深さではなかろうか。

もう一つ。深井氏はプロテスタンティズムの現代社会への貢献として「共存の作法」に言及。つまり「エキュメニズム／共生」の問題である。その内容的な論述は頁数の関係か、ほとんどないが、その方向性は間違っていないと思う。今後の課題である。

所長 江口 再起

『ルターと宗教改革500年』 江口再起著 (NHK出版、2017年)



この本はNHKのカルチャーラジオのテキストとして書かれた本である。それ故、初心者でも理解できるように平易な言葉で書かれている。

それだけではない。ルターの研究を重ねている方にとっても学ぶことが多いと思われる本である。

内容の濃い本である。その中で私が考えさせられたトピックを書きたいと思う。それは、ルターの聖性と日常性の捉え方である。このような興味深い記述がある。「ルターにおいて特徴的なことは、(中略)内面性と世俗性、あるいは聖性と日常性がバラバラでなく一つのことなのです。」ルターが修道院を出てきたことは、彼が修道(生活)そのものを否定したわけではない。あくまでも世俗から隔離された特別な修道院生活を否定したのである。その逆に、この世俗において修道をしていくことを目指したのである。この聖性と日常性が一つになっているルターから、私達は今日において、尚修道の現代的意味を新しく捉えなおすことができる。もちろん修道という言葉から、安易に行儀義認を考える必要はない。恩寵義認から、愛の業としてこの世に仕えていく。この基本をおさえつつ、私達はこの世俗における修道の生活を考えていく必要があると思われる。ルターは言う。「私は修道士ですが、修道士ではありません。」ルター自身、この世俗での修道を生き抜いた人間であるといえる。

信仰の知的理解に傾きやすいプロテスタンティズムに対して、ルターの修道的あり方は現代でも私達に警鐘を鳴らしているのである。

日本ルーテル神学校4年(研究所助手)
筑田 仁

『ルターと宗教改革』第7号 (日本ルター学会研究年報 宗教改革500周年記念号)(2017年)



ルターは歴史上の人物ではあるものの、その名はアイコンとなり、広大な神学世界へと通じる記号のような存在でもある。記号として

の「ルター」。それが指し示すものは多彩であり、思わぬ形で「ルター」に出会うこともある。パソコン上でアイコンをクリックすれば幾層にもわたるフォルダやファイルを開くことができるように、神学者ルターだけでなく、歴史や教育、また政治経済その他の領域でルターとその知的世界に出会うこともある。しかし「ルター」はあくまで歴史に生きて活動した人物であり、ルター自身のテキストの読解は基本となる。この度日本ルター学会から刊行された研究年報、「宗教改革500周年記念号」はそのルターのテキストにアプローチする構成となっている。

学会誌であるのでルターを専門とする論者たちが高度な研究成果をふまえて各論を展開しているが、その収録構成は専門外の人ルターに関心を持てる編集となっている。ルターの宗教改革以前の主要著作にはじまり、手紙や讃美歌などの論考にまで及んでいるので、ルターの活動年代を追ってアラカルト風に原典を手取ることもできる。したがって、ルターを専門とする人以外もまたこの研究年報を手に取り、ルターの世界に触れ合う機会とすることもできるであろう。惜しむらくは本書が非売品であるということだ。神学校の図書館等でぜひ手に取ってみたい。

所員 宮本 新

研究所ニュース

所長 江口 再起

●五〇〇年の年の活動

昨年のルター研究所は五〇〇年を記念する活動に総力を挙げて取り組みました。

① 六月五〜七日「信徒と牧師のためのルター・セミナー」。テーマは「五〇〇年の年、ルターに出会う」。会場はマホロバ・マインズ三浦。三五名。

② 一〇月三二日「宗教改革五〇〇年記念 講演と音楽の夕べ」。講演は竹原創一「九五カ条の今日の意味」、鈴木浩「宗教改革の核心」。演奏はムジカ・サクレ・トウキョウ（指揮山田実）によるバッハ「カンタータ八〇番」。会場は東京教会。二五〇名。

③ 出版 研究所の紀要『ルター研究』の別冊シリーズ「宗教改革五百周年とわたしたち」を二〇一三年より出版（既刊四冊、別冊五号は今秋出版予定）。また日本福音ルーテル教会の委託により『キリスト者の自由』を読む』等の編集執筆に協力（三面をぐらんください）。

④ 展示 ルーテル学院大学図書館と共催でルターと宗教改革に関わる資料等の展示。

⑤ 研究所所員による五〇〇年をめぐる各教会での礼拝説教、講演会、学会発表、放送等。

●二〇一八年の活動

次のような予定です。どうぞご参加下さい。

① 公開講座。前期は「ルター概論」（江口所長担当）、後期は「ルターとルーテル教会」（石居所員、宮本所員担当）。

② 「牧師のためのルター・セミナー」六月四〜六日、御殿場の東山荘で。テーマ「五〇〇年からの出発」。内容は、五〇〇年の総括、研究発表、ルターと説教、教会をめぐる徹底討論等。

③ 「秋の講演会」十一月一八日（日）午後二時、大森教会で。講師は小田部進一（玉川大学教授、『ルターから今を考える』著者）。

●故佐藤繁彦博士の遺品の寄贈

佐藤繁彦博士（一八八七〜一九三五）は日本におけるルター研究の先駆者です。戦前、日本ルーテル神学校の教授を務められ、その著書『ロマ書講解に現れたるルッターの根本思想』は記念碑的労作です。ご遺族より教授の研究ノート等を寄贈していただきました。機会をみつけて展示等をしていきたいと考えています。



●ルター『詩編第百一篇詳解』初版本

ルーテル学院大学図書館では、五〇〇年を記念して、ルターの貴重な初版本を購入しました。『詩編第百一篇詳解』の一五三四年の初版本です（Der C1.Psaln, dunch D.Mar.Luth.Angelegt）。ルターは聖書の中でもこのほか詩編を愛読していましたが、詩編第百一篇を彼は「ダビデによる王の鑑」と呼んでいました。

●ルター研究所の構成メンバー

ルター研究所の所長が、この四月に、鈴木浩先生より江口再起（ル学大）に交代しました。なお所員は次の方々に、鈴木浩（ル学大名誉教授）、高井保雄（羽村教会）、立山忠浩（都南教会）、石居基夫（ル学大）、宮本新（ル学大）、徳善義和先生は名誉所員です。また今年度のルター研助手は筑田仁神学生です。どうぞよろしくお願ひします。

●献金のお願ひ

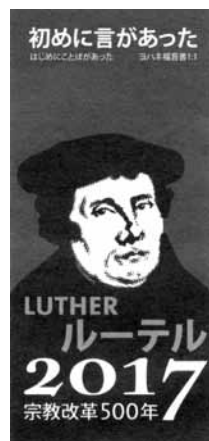
ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（二〇〇万円）と皆さんのご支援（およそ一五〇万円）で成り

立っています。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願ひいたします。



四面から続く

その再検証の過程で、教会の改革がどうしても不可欠であることが判明する。こうして「教える人、ルター」が、「宗教改革者、ルター」となっていく。しかし、ルターは「教会の改革はわたしの意志でも意図でもなかった」と語っていたように、自ら望んで改革者になつたわけではなかった。後の世代の人々はしかし、そこに「神によるルターの召命」を見たのであった。



ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三ー一〇一二〇
電話 〇四二一三ー一四六一一
発行責任：江口 再起（所長）
e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp